

Ⅳ. 中学選択プロジェクト・高校新教科群

中学選択プロジェクト

2年間の実践の評価と展望

藤田高弘

1 中学選択プロジェクトの授業実施状況

中学選択プロジェクトの授業は、2001年度から併設型中高一貫カリキュラムに導入された。一年間の授業実践を引き継ぎ、2002年度には新しい講座も展開された。2001年度の中等教育研究協議会での発表や討議、1年間の実践から今後の問題点も明らかになってきた。

また今年度は、中高一貫カリキュラムに関する大規模なアンケート調査が本校で実施された。この報告書では、生徒・保護者・教員を対象にしたアンケート結果の分析と解説を加え、研究開発の総括の年である来年度に向けて、学校全体のカリキュラム全体から概観した選択プロジェクトの在り方や今後の展望をまとめた。

2 併設型中高一貫1-2-2-1制のカリキュラムの中での選択プロジェクト学習

本校の併設型中高一貫のカリキュラムは、6年間で1-2-2-1制に発達区分している。具体的には「個性を探る」から「個性を伸ばす」の一貫性を基に、入門基礎期、個性探求期、専門基礎期、個性の伸長の4区分である。選択プロジェクトは1-2-2-1制の個性探求期の2年間に実施される学習である。浅く、広い学習を通して、個を探り、また自立と共同の学びを目標とする区分期でもある。そこで、選択プロジェクト学習では9教科から選択できる学習の機会を用意し、また異年齢の学習形態をとる。

また、専門基礎期の2年間にある新教科群との連携をも視野に入れている。新教科は、基本的に教科が主体となるが学習テーマが大きく、深く、多様に設定するので学習の内容が合科的なものとなる。その学習目標を達成できるように、各教科の枠内で発展的な学習に必要な基礎力を選択プロジェクト学習で培うことも視野にいれている。

3 2002年度選択プロジェクトの評価(アンケート結果の要約)

1) 選択プロジェクトの各講座の学習内容については、94.8%の生徒が通常の授業とは異なる内容を学習できたと回答し、89.9%の父母が同様に考えていることが分かった。特に、生徒の52.3%が「とてもそう思う」と回

答している。

2) 学習の方法についても、90.2%の生徒が普段の授業とは異なる方法で学習できたと回答し、94.1%の父母が同様に考えていることが分かった。

初期の目標であった通常の教科授業では時間・人数の制約から充分に取り扱うことができない学習内容を講座の目標に合わせた学習方法で十分に展開されていた。教官の視点から推測すると、授業時間の保障、学習環境や形態を整えたい、深めたい学習内容が確実にあると言える。

3) 選択プロジェクトの授業を通して各教科の基礎・基本が身に付いたと肯定的に答えた生徒は47.4%、父母では47.5%が各教科の基礎・基本が身に付くと肯定的に答えた。生徒、父母ともに約50%が各教科の基礎学習内容に対する有用性を低く受け止めていた。教師の39.3%が各教科の基礎・基本が身に付くと肯定的に答えたが、教師の約60%が基礎学習の有用性を低く受け止めていた。

その理由を推察すると、一つには各教科の基礎・基本という言葉の定義が不明確、または解釈が多様で統一できていないと考えられる。または、1講座あたり2時間連続の隔週で8回という現行システムでは発展的な学習には向いているが、継続的な学習が必要となる基礎・基本の学習には向かないという判断があるとも推察できる。

4) 少人数学習については、83.7%の生徒が少人数学習によって学習に取り組みやすかったと答えている。父母の89.9%が少人数での学習環境を肯定的にとらえている。教官の100%が、少人数学習での有効性を高く評価していた。

教官にとっては、大胆かつきめ細かい授業計画が立案しやすかったと考えられる。少人数による授業、その人数に最適化した授業計画、選択による比較的高い動機付けをとまった学習という3つの条件がそろうことによって学習環境への肯定的なイメージが作られたと推測できる。

5) 生徒の情意的な側面を見てみる。自分の選択している講座の教科に関する、興味・関心、意欲においても肯定的な回答をする生徒が多かった。以前より好きになったと答える生徒が、73.2%いた。父母の76.5%、教師の85.6%が生徒の選択している教科への好感度が高くなったと感じている。

6) 選択している教科の興味・関心が高まったという生徒は71.2%で、父母が80.6%、教師が96.3%と回答していた。

選択プロジェクトの授業の目的である興味・関心の掘り起こし、普段の授業で扱われる単元ごとの学習項目の関連性への気づき、また新たな観点からの学びといった学習プロセスがあったと推測できる。もちろん、それぞれの講座を選択した生徒の約8割は第1希望、残りの約2割の生徒も第二希望の講座に入っているの、元々の動機付けが高いと考えられるので、学習内容や方法だけがよかったと言えないであろう。

しかしながら、自分の選択した講座に対する動機付けが高いだけで、講座の学習内容に肯定的なイメージを抱くことは少ないと考えられる。生徒の興味・関心を土台に、教官が各教科の観点から指導計画を立て新たな学習素材や学習方法を創意工夫し、学習への積極的な参加を図ったと考えられる。その結果として、学習項目への関連性に自ら気づいたり、新たな観点から学び直すことで、選択した講座の教科への興味・関心が高まったり、普段の教科授業への意欲が高まったと考えられる。

7) 異年齢学習については、生徒の53.3%、父母の66.9%、教師の60.7%が異年齢の学びが自分の学習の助けとなったと答えており、情意の面においても生徒の49%、父母の63.6%、教師の57.1%が異年齢により学習意欲が高まったと答えるにとどまった。

一講座内の中学2生と中学3年生の数はバランスよく配分することができなかった。それは、選択の希望を最優先した結果、異年齢の数のバランスまでを考慮した調整が困難であったからである。また、指導法において異年齢を考慮して学習内容、方法を展開しやすい教科と、難しい教科があった。しかし、教科による差はあるが、異年齢による学びあいの良い機会となったり、学習への良い刺激となったと自由記述の中にはあった。

4 評価基準の作成意図と内容

通常の教科にある観点別の評価を基盤に、選択プロでの授業の目的、目標に合った新たな観点別の評価基準を設けた。各講座の基本となる観点を抽象的に4つ設けた。

それは、1) 事象への関心・意欲・態度、2) 創意工夫する能力、3) 学習内容をまとめ・表現する能力、4) 事象についての知識・理解である。選択プロは教科が主体で授業が構成され、教師が学習内容を構成して教科の視点から、補ったり、深めたり、育てたり、身に付けさせたい観点がある。そこで、前述の抽象的な観点の項目から具体的な評価基準を各講座の担当者が設定した。これは、今後の選択プロジェクトの評価の在り方を考える時の重要な資料ともなる。また、既存の教科との系統性や関連性を強く求めるならばこの評価基準、評価フォーマットの研究をさらに深める必要がある。さらに、専門基礎期にある高校での新教科群との接続を考えるならば、系統的に伸ばしたい学習力を評価するシステムを考える必要がある。基本的に評価は学びの方向を決めると考えるからである。

5. 選択プロジェクト2年間の回顧

1) 学びの回復

「時間と人数の条件が満たされれば、普段の授業でもっと深めたい、もっと時間をかけて取り組みたい。」という想いを抱いた教官と、「普段の授業ではできなかったこの内容をもっと学びたい。」という想いを抱いた生徒が集まり、時間と学びを共有する。そんな時間が選択プロジェクトであった。学校で過ごす時間の大半は教科の授業が占めている。そこには、ここまで教えなければ、到達しなければという切迫感を持った教師がいる。一方これを覚えなければという思いを持った、または意図的にその学びから逃走する生徒がいる。そんな空間から解き離された学びの空間が、選択プロジェクトの時間となった。

もちろん、楽しいだけ、自分のやりたいことだけを学ぶのが学校の学びとは思わない。あの時これをたたくまされたから、いま役に立っているということが必要なこともわかる。「将来のためにいま苦勞をして勉強しなさい。」は、教師や親のよく使うセリフである。「将来のため」、「教え込む」という薬が効かない、その目的だけでは学びから逃走する生徒がいる。社会が豊かになり、学歴神話が崩壊したと考える人もいる。また、成績に問題はなくてもどこか冷めた学びを感じさせる生徒がいる。学ぶ意欲や目的を感じさせない学びも見られる。このようなジレンマの中で、2週間に一度、2時間の学びの回復の時間となって欲しかった。授業の準備や勉強に疲れるけど、選プロの時間にどこか感じる開放感、授業後の充実感がある。いままでの普通の教科の時間では体験できなかったことを、集中して取り組める。時間の過ぎるのが早い。2週間に一度の時間がまちどおしい。多くの生徒がそう思える時間であって欲しかった。授業中さえない顔をした生徒の顔に輝きもどる「学びの回復」の時間をそこに求めた。

2) 未来

学ぶ意欲の向上、各教科の基礎・基本の充実が求められる時代にこそ、いま進行している生徒の学びの実態をしっかりと見つけ直したい。現場感覚を研ぎ澄ませ、生徒の学びの質の変化をしっかりと捉えたい。基礎・基本の定義を幅広く見つけ直したい。基礎・基本を浅い定義で理解し、短絡的に反復、ドリルの充実だけに向かうのではなく、生きて働く基礎・基本、自立的に学ぶ技術や、学ぶ意欲を根本から問いかける学びの回復へと向かいたい。既存の教科の枠組みでは実現しにくい学習内容を、教師がいまある生徒の学びの実態を理解しリードしながら、かつ必要に応じて生徒が学習計画に参加しながら、生徒同士、生徒と教師が生き生きとした学びの時間を共有する。このような学びを体験し、普段の教科の学習に帰っていく。選択プロジェクトの学習経験が、学習内容に新たな光を当て、普段の教科の学びが深まり、甦る。自己の特性に気づいたり、自己の新たな発見につながる。このような理想を持ちながら、選択プロジェクト学習は、学びの意味を生徒と教師に問いかけ続ける。

5 まとめと今後の展望

今回の大規模なアンケートは、生徒、保護者、教師、そして学校というシステムがどのように変わっていくのかという変化の記録として有意義であった。この三者の有機的な連携が教育課程の開発に大きな影響を持つと考えるからである。

本校の中学選択学習は、趣味的なクラブ活動とは目的を異にする。それは、教科の観点から補いたい、深めたい学習内容を生徒が主体的に学べるように授業を構成し、模索しながら、生徒とともに学びを創る実践であるからである。選択プロジェクトの学びが普段の授業にフィードバックされることを念頭に入れて授業を創るからでもある。基本は各教科を主体にした発展的な授業といえる。

2002年度のアンケート調査から推察できることがある。少人数による授業、その人数と参加生徒の個性に最適化した授業計画、選択による比較的高い動機付けをともなった学習という3つの条件がうまくかみ合うことが大切である。さらに、既存教科、専門基礎期での新教科群との系統性を考えると、選択学習での評価システムを充実させていく必要がある。特に、自己の個性を探り、探求する機会を与えつつ生きて働く知識を養うことを目標にするならば、各講座の評価観点にとどまらず、学びを方向付け、個の学びの過程が見えてくる有機的な評価システムを考案する必要がある。選択プロジェクトを通して学習することによって、生徒のどのような「学びの力」が身につくのかを明確にしていく必要がある。

また異なる問題点として、9教科10、11講座、半期2時間連続8回分の展開が真に個の個性を探求する機会に成りえているのかという議論もある。講座数が多いことにより間口が広すぎる可能性もある。また、2週間置きにあり、8回という短期で一講座が終わり、2度同じ講座を選択できない制度になっていることが、個性を探求する経験を狭めている可能性もある。この点は今後調査、検討してみる価値がある。

次に今後の課題として、学校全体のカリキュラム全体から概観した選択プロジェクトの在り方を考えてみる。選択授業の担当者が実施したい学習内容と生徒の選択したい学習内容が限りなく一致するというシンプルな方針も大切である。また、生徒が選択授業のシラバス作りに参加するという方向性もある。一方で、中学選択プロジェクト、各教科、総合学習、英語、数学の基礎・基本の時間と相互に有機的に関係し自律的な個の確立、学びを共有できる集団作りとなるように相互の関連性や系統性を展望し今後の在り方を考える必要もある。